

医学用語集における外来語の表記・語形のゆれについて

西嶋 佑太郎

一、はじめに

外来語には表記や語形が一定に定まらず、ゆれが生じているものが多い。内閣告示として一九九一年に「外来語の表記」が出されているが、各分野の慣用を認めており、必ずしも統一を図る趣旨ではない。専門用語においても、外来語には多種多様なゆれが存在している。専門用語は「外来語の表記」では対象外とされており、専門分野に対応がゆだねられているが、個々に対応している分野は少ない。このうち医学分野では二〇二一年に用語表記基本指針策定ワーキンググループが立ち上がり、目下検討中であるが、これまでに医学分野での表記・語形のゆれを扱った研究や調査は見られない。専門用語は、情報伝達の正確性という観点からゆれが少ないことが求められるというだけでなく、今後の電子化に向けた情報処理の観点や、日本語母語話者、非母語話者に対する教育の観点からみても、ゆれの実態把握と整理が必要であると考えられる。

そこで本稿では、専門用語の一例として医学分野をとりあげ、医学用語集を対象に、医学分野の外来語の表記・語形のゆれの現状、用語集の凡例におけるゆれへの対処の状況を調査した。

外来語の表記・語形のゆれを広くとらえると、A字種のゆれ(アルファベットかカタカナか)、B語形のゆれ(原語の違いや綴字発音、慣用によるゆれ)、C表記のゆれ(一つの語形に対する表記のゆれ)という三つの層が想定できる。医学用語集においては、一般語に比べてBの層のゆれが目立っていた。そして用語集の凡例では、一般語の「表記のゆれ」の問題として中心に扱われるCの層よりも、AやBの層への対処が相対的に重視されていた。これを踏まえ、専門用語の外来語の表記・語形のゆれを調査し方針を議論する際には、Cの狭い意味での表記のゆれに着目するだけでなく、Bの語形のゆれやAの字種のゆれといった層まで視野を広げたほうが良いことを提案するものである。

二、ゆれの三層とこれまでの対処

二一、ゆれの三層

表記または語形のゆれと言った場合に、基本的にはCの層での問題が論じられてきた。一般に表記のゆれを論じる際には、

語形(発音)のゆれとの関係が問題となる。国立国語研究所(一九八三)では、アルミニウム-アルミニウム、バイオリン-ヴァイオリンなどを純粹に表記のゆれとし、アイデア-アイディア、ミックス-ミクスなどは判断が難しく、サファイヤー-サファイア、フェルト-フェルトなどは語形のゆれが表記に反映しているとする(二)。これに対して小椋秀樹(二〇一三)では、表記のゆれか語形(発音)のゆれかを厳密に判定することが困難であること、それに加えて湯浅茂雄(二〇〇二)では厳密に調査対象を表記のゆれに絞ると、扱う問題がかなり限定されてしまうことを理由に挙げ、表記のゆれの範囲に語形のゆれも含めて考察を行っている。本稿も小椋や湯浅に従って表記のゆれを広めにとらえ、右のように同一の語形(発音)にもとづくと考えられるものをC「表記のゆれ」の層ととらえることにする。

- 一方で、右のような例以外に、もともと外国語の語形にバリエーションがある場合がある。松崎寛(一九九二)では、「単なる表記上のゆれによる」とは考えがたい」として次の四種の対を調査対象外としている。
- ① カデンツァ(伊)／カデンツ(独)、リアリテイ(英)／レアリテ(仏) 原語の違い
 - ② ブディング／プリン、ラディッシュ／ラデシ／ラレシ 綴字に頼るか耳に頼るか
 - ③ チェロ／セロ、ピッツァ／ピザ、ツイター／ジター 原音と異なる綴字発音
 - ④ ステイック／ステッキ、チェック／チッキ 指示物の変化

本稿はむしろこうした例をも取り上げる必要があると考え

る。うち④は意味用法との関係が強いのでここでは除くと、①②③は綴字に基づく発音、原語の違いといった、もともと語形が異なるゆえのバリエーションである。①や②の例に言及する石綿敏雄(二〇〇二)ではこれを「語形と表記」という項目で説明している。本稿ではこうした①②③のような例を特にB「語形のゆれ」の層としてとらえることとする。

このほかにA「字種のゆれ」の層というものも想定できる。ただし基本的には外来語をカタカナでどう表記するかが問題の中心となりやすいため、字種は問題の中心とはなりにくい。

二二、一般語の表記のゆれの類型

調査の前提として、一般語における表記のゆれの類型について確認する。小椋秀樹(二〇一三)では、一九九一年の「外来語の表記」をもとに次の(A)から(S)の十一に分類している。このうち特に(A)(イ)について湯浅茂雄(二〇〇二)に基づいて細分化し、さらに筆者が(イ)―四を加えたものを次に示す。ここに示すものはCの層のゆれということになる。

- (ア) ー シェ・ジェーセ・ゼ
- (ア) ー テイ・ディーチ・ジーテ・デ
- (ア) ー フア・ファイ・フェ・フォア・ハ・ヒ・ヘ・ホ
- (イ) 「外来語の表記」第一表と第二表による表記法の対立
 - (イ) ー トウ・ドウツ・ズート・ド
 - (イ) ー ヴァ・ヴィ・ヴ・ヴェ・ヴォーバ・ビ・ブ

ベ・ボ

- (イ) 一三 クア・グアーカ・ガ
- (イ) 一四 テユ・デユーチユ・ジュ

(例) デユースーージュース

- (ウ) 語末長音 例…コンピユーターコンピユータ

- (エ) 語中長音 例…マネージャーマネジャー

- (オ) 長音―連母音 例…メール―メール

- (カ) イアーイヤ 例…ピアノーピヤノ

- (キ) クスーキス 例…テクスト―テキスト

- (ク) 促音 例…ルネッサンス―ルネサンス

- (ケ) 撥音 例…エンターテインメント―エンターテイ

メント

- (コ) 清濁 例…スムース―スムーズ

- (サ) その他

二二三、表記・語形のゆれに対する対処

二二三―一、「外来語の表記」と報道等の対応

二二三節のような表記のゆれに対して、一定の目安をつくる取り組みがある。公的なものとして一九九一年に内閣告示された「外来語の表記」がある。「外来語の表記」では第一表として一般的に用いるものを挙げ、第二表として原音や原綴りになるべく近く表そうとする場合に用いるものを挙げており、二段階で示されている(図一)。留意事項その一には「二一、「ハンカチ」と「ハンケチ」、「グロブ」と「グラブ」のように、語形にゆれのあるものについて、その語形をどちらかに決めよう」と

はしていない」二二、語形やその書き表し方については、慣用が定まっているものはそれによる。分野によって異なる慣用が定まっている場合には、それぞれの慣用によって差し支えない。」五、第二表に示す仮名を用いる必要がない場合は、第一表に示す仮名の範囲で書き表すことができる」とあり、語形や表記の統一を図ろうとするものではなく、慣用を認める立場にある。特に語形のゆれについては、方針を定めていないことが注意される。そのため小椋秀樹(二〇一六)の指摘するように

図一、「外来語の表記」に用いる仮名と符号の表(文化庁ホームページより引用)

第1表		第2表	
オコソトノホモヨロ	ゴソドポボ	キシチニヒミリギジビ	キシチニヒミリギジビ
エケセテネヘメ	ゲゼデベ	ユキチニヒミリギジビ	ユキチニヒミリギジビ
ウクスツフムユル	グズ	ブ	ブ
イキシチニヒミリ	ギジ	ビ	ビ
アカサタナハマヤラワガザダババ	キヤヤヤヤヤヤヤヤヤヤヤヤ	キシチニヒミリギジビ	キシチニヒミリギジビ
	ン <small>(促音)</small>		
	ッ <small>(長音符)</small>		
	ー <small>(長音符)</small>		

「外来語の表記」の性格が外来語表記のゆれを生む要因の一つとなつていと考えられる。

また、「外来語の表記」では、「科学、技術、芸術その他の各種専門分野や個々人の表記にまで及ぼそうとするものではない」とあり、専門用語は対象外となつている。

これに対して、新聞、放送関係はそれぞれの企業が有する用語集に外来語の表記の原則をもっている。これらの用語集によつて表記のゆれが解消しているわけではなく、実際は、同じ「表記の手引き」を使用しても、個人ルールや思い込みを要因として、表記のゆれが発生することが報告されている（増地ひとみ（二〇二一））。

二二二二、化合物・医薬品における字訳

「外来語の表記」では、専門用語は対象外とされているため、専門分野の外来語の表記・語形のゆれに対しては専門分野独自のルールを検討する必要がある。しかし、専門分野の外来語の表記・語形のルールを明文化したものはほとんどない¹⁰⁰。

このうち化学分野では化合物の表記で「字訳」と称される表記法が用いられている。二二二節でとりあげた松崎寛（一九九二）の③「原音と異なる綴字発音」にあたる。この方法は、語形と表記の分離を試みており、かつ医学分野に密接にかかわる分野であるため、その議論を取り上げる。

字訳 *transliteration* は一九七〇年代に議論され、使用されるようになったもので、畑一夫（一九八〇）によるとその経緯は次の通りである。もともと化学用語はドイツから流入したため、

ドイツ語発音に近い語形に基づくカタカナ表記を用いていたが、第二次世界大戦後、英語が主流になるに従つて、英語発音（語形）との乖離が生じるようになった。これに対処するため、化合物の表記を発音（語形）とは分離して、アルファベットの綴りを機械的にカタカナに書き換える字訳、すなわち語形を前提としない純粋な表記の方針をとることに落ち着いた。その際、従前の用語との連続性を考えてドイツ語の発音に近い対応表を作成した（図二）。

表記と語形を分離することは用語を使用する者にとまどいを生じ、一九九二年のシンポジウム「外来語か訳語か？」（『専門用語研究』四所収）には、「そう発音しろとは書いていない。化合物字訳のルールで」とあるというように、やはり純粋な表記の方針であることが強調された。しかし、特に原語を知らずに字訳に則った化合物名を学習した場合など、表記と語形を完全に分離することは困難であると思われる。そのため、表記の方針とはしているものの、実質的には、B語形のゆれの層にもまたがる方針になっていると思われる。

この字訳の原則は現在でも有効であり、二〇一六年の『化合物命名法 IUPAC 勧告に準拠』にも掲載されている。また、この字訳の方法は、医薬品の名称の決定にも使用されており、二〇二二年二月四日付の「医薬品の一般的名称の取扱いに関する事務手続等について（薬生薬審発二〇二〇四第三号）」でも、字訳の表が掲載されている。

一方で、英語発音による語形・表記との間で生じるゆれは残存していることが指摘されている（藤井敦・田中るみ子（二〇一〇））。字訳の方法は、化合物のように原語自体がある程度規

ら、『日本医学会医学术語辞典』第三版(二〇〇七年刊行、二〇一四年よりWEB版)とした。またその比較対象として、各学会が発行する用語集および各学会や公的機関のWEBサイト等を参照した。ただし、本稿で扱った用語集は、紙媒体であるか、WEB版でもブラウザ上で検索する形式をとるものが多いため、すべてのゆれを網羅した調査および量的な検討は行えていない。

三二一、ゆれの類型

以下に二二二節に挙げた外来語一般の表記・語形のゆれの類型に依拠して挙げる。(医)は『日本医学会医学术語辞典』に掲載される表記であることを示し、他の用語集等の用例の出典については適宜括弧内に記し、調査資料として論文末尾にまとめた。また作業の過程で(サ)一、(サ)二、(サ)三を新たに設け、語形のゆれについては、二二二節の松崎寛の分類に基づいて分類した。本稿の調査は全数を把握したものではないので、挙げた具体例は典型的なもののみである。類型を示すことが目的であるため、個々の用語の説明は省略した。

・表記のゆれ

(ア)「外来語の表記」第一表内の表記法の対立

(ア) ー、シエ・ジエーセ・ゼ

【該当みられず】

(ア) ー、テイ・デイチ・ジータ・デ

ライデツヒ細胞(医)ーライデイツヒ細胞(産科婦人科)

用語集) Leydig

ニューモシスチスカリニ肺炎(医)ーニューモチ(シ)

スチ(テイ)ス・カリニ肺炎(呼吸器学用語集)

Pneumocystis carinii

(ア) ー、ファ・フィ・フェ・フォーハ・ヒ・ヘ・ホ

シクロフオスファミド(医)ーシクロホスファミド(日

本薬局方) cyclophosphamide

(イ)「外来語の表記」第一表と第二表による表記法の対立

(イ) ー、トウ・ドウツ・ズート・ド

【該当みられず】

(イ) ー、ヴァ・ヴィ・ヴ・ヴェ・ヴォーバ・ビ・ブ・ベ

・ボ

ドノバン小体(医)ードノヴァ(バ)ン小体(内科学用

語集) Donovan

クボステック徴候(医)ークヴオステック徴候(神経学

用語集) Chvostek

(イ) ー、クア・グアーカ・ガ

【該当みられず】

(イ) ー、テュ・デューチュ・ジユ

デューリング疱疹状皮膚炎(医)ージューリング疱疹状

皮膚炎(難病情報センターH P) Duhning

(ウ) 語末長音

ペースメーカ(医)ー胃ペースメーカ(消化器病学用

語集) pacemaker

マジヤンデイ孔(医)ーマジヤンデイ

孔(医) Magendie

(エ) 語中長音

腹部アンギーナ (医) — 腹部アンギナ (内科学用語集)

angina

(オ) 長音—連母音

チェーン・ストロークス呼吸 (医) — チェイン・ストローク

ス呼吸 (アレルギー学用語集) Cheyne-Stokes

パニコロー染色 (医) — パパニコロウ (細胞診用語解

説集の本文) Papanicolaou

(カ) イアーイヤ

チクングニヤ熱 (医) — チクングニア熱 (感染症学会 H

P) Chikungunya

(キ) クスーキス

【該当みられず】

(ク) 促音

バソプレシン (医、糖尿病学用語集) — バソプレッシン

(医)、バソプレッシン (神経学用語集) vasopressin

オディ括約筋 (医) — オッディ括約筋 (消化器病学用語

集) Oddi

アシヨッフ・田原結節 (医) — アシヨ(ツ)フ・田原結

節 (呼吸器学用語集) Aschoff

(ケ) 撥音

イオンチャネル (医) — イオンチャンネル (内科学用語

集) channel

動的アライメント (医) — 塩基配列アラインメント (医)

alignment

(コ) 清濁

ライソソーム (医)、リソソーム (医、循環器学用語集)

— ライソソーム (医、循環器学用語集) lysosome

クロイツフェルト・ヤコブ病 (医) — ヤーコブ・クロイ

ツフェルト病 (内科学用語集) Creutzfeldt-Jakob

エプスタイン奇形 (医) — エプスタイン病 (循環器学用

語集、内科学用語集) Epstein

(サ) その他

(サ) 一、小書きか否か

ウイップル三徴 (医) — ウイップルの三徴 (糖尿病学用

語集) Whipple

(サ) 一、出をタ行とするかサ行とするか

メトトレキサート (医) — メソトレキサート (呼吸器学

用語集) methotrexate

ミオパチー (医) — シオパシー (内科学用語集) myopathy

(サ) 一、三、その他

デュビユイトラン拘縮 (医、糖尿病学用語集) — デュブ

イトラン拘縮 (皮膚科用語集) Dupuytren

・語形のゆれ

①原語のゆれ

アンドロゲン (医) — アンドロゲ(ジ)エン (産科婦人科用

語集) androgen

アンジオテンシン (医) — アンジオテンシン (呼吸器学用語

集) angiotensin

②綴字に頼るか耳に頼るか

クリプトコックス症 (医、綴字) — クリプトコックス症 (呼

吸器学用語集) cryptococcus

リザーバ (医、綴字) — リザーバー (呼吸器学用語集、綴字)

— レザーバー (内科学用語集) reservoir

③ 原音と異なる綴字発音

シエディアック東症候群(医) — チエディアック東症候群(内科学用語集、綴字) Chediak

三二二、医学用語のゆれの特徴

以上のように、一般的に見られる表記・語形のゆれの類型は、そのおおよそが医学用語でも見られるものであった。医学用語の外来語の原語は英語やドイツ語など、一般の外来語でも存在しうる範囲の言語であるため、一般語と類型がおおよそ重なることは特に驚くべきことではない。しかし、その中に医学用語での特徴がいくつかあると思われる。

まず今回の調査では見つけられなかった類型があった。

(ア) — のシエ、ジエについて、特にジエは *gen* を「ゲン」とドイツ語のように読むか「ジェン」と英語のように読むかという語形のゆれが多く存在するために、ジエゼという軸での表記のゆれが生じにくい可能性がある。(イ) — のトウ、ドウについては、*tu* または *du* という音をチュ、デュで表記することの方が多いために、表記のゆれが収集できなかった可能性が考えられる。ほかに (イ) — 三のクア、グアや(キ)のクスキーも見られなかったが、一般にも多くは見られない^(四)。ため医学用語の特徴かは判断しにくい。

次に医学分野で目立つと思われるものがあつた。(サ) — 二の

h の音のゆれは *neuropathy* ニューロパチーや *nyopathy* ニオパチーなど *-pathy* (パシーまたはパチー) を要素を含む医学用語が比較的多いからか、頻度として一般よりも多い可能性がある。B 語形のゆれの層 (一部、表記のゆれ (コ) にも及ぶ) では、ドイツ語と英語という原語の違いが、医学用語では目立っていた。

四、医学用語集の凡例におけるゆれへの対処

四一、調査対象

本章では、医学用語集の凡例を対象として、医学用語において外来語のゆれの三層のうち、どの用語に、どの層の問題が生じているかを調査した。凡例では C 表記のゆれの層ではなく、A 字種のゆれの層や B 語形のゆれの層が主たる問題となつてい

ることを示す。

外来語の表記・語形について専門分野がなんらかの意思決定をした場合、それが反映されるのは、主にその専門分野で公式に使われる用語集であると考えられる。拙著 (二〇二二) は、日本医学会の一三九の分科会 (下位の学会、数は二〇二二年当時) のそれぞれに用語集があるかどうかを調査しており、各学会 (分科会) が何らかの形で関与した用語集、用語辞典をもつものは、八六種あるという結果であつた。これに『日本医学会医学用語辞典』を加えた八七種の用語集のうち、凡例または編集方針で外来語の表記・語形についてわざわざ言及がある三四種を本章の調査対象とした。それぞれの用語集の凡例や編集

方針は、精粗さまざまなものがあつたため、記載の少ない用語集には、外来語の表記・語形等の規則については書かれず、単に用語集内の配列のルールを示しただけのものもあつた。そのため以下の結果の用語集の数を足しても三四種には満たない。

四十一、結果と考察

用語集の凡例における外来語の表記・語形についての記述は、(1)冠名用語（パーキンソン病などのように人名や地名などの固有名詞を冠した用語）、(2)医薬品・化合物、(3)その他の名詞、のように大きく三つの分野に分けられた。それぞれについて記載内容を記し、若干の考察を加える。

四十一、冠名用語

・基本的な表記をアルファベット表記とするもの（四用語集）
調査中唯一、A字種のゆれの層に言及するものである。最も極端な用語集は『小児科用語集』第二版（二〇〇九年の凡例あり）で、「人名は基本的に原語表記のままで示し、カタカナ書きにはしない」とある。三四種の用語集の中で人名のカタカナ表記をしないことを明記するのは『小児科用語集』のみであった。ほかに、『糖尿病学用語集』第三版（二〇一一）に「原則として原語表記」、『整形外科学用語集』第八版（二〇一六）に「人名は原則として欧語のまま」とあるが、実際はカタカナも併記されているものが多い。

・英語の語形を優先するもの（一用語集）

『泌尿器科用語集』第五版（二〇一九）に「人名の読みは、基本的に英語読みとした」とある。英語読みを優先すると述べるものは泌尿器科のみであった。

・母語・原語の語形を優先するもの（一用語集）

人名であればその人物の母語での発音に従うとする用語集が最も多かった。ただし慣用への言及には濃淡が見られた。すなわち、『呼吸器学用語集』第五版（二〇一七）「人名の読みは原則として原音主義とした」や、『先天異常用語集』（一九九一）「人名の和訳は、当該国人が用いる発音又は本人が用いる発音に最も類似した音をカタカナで表わした」のように、母語の発音（語形）のみに言及するものもあれば、『腎臓学用語集』第二版（二〇〇七）「母国語音を尊重したが、慣例読みも採用した」、『眼科用語集』第六版（二〇一八）「人名に関しては極力母国語に準拠、もしくは従来、眼科領域で慣用され日本語化している場合は、日本語化したカタカナ表記を踏襲する」のように、慣用の採用に言及するものもある。ただし、各用語集についてどれが母語由来でどれが慣用なのかは、凡例や用語集内で示されているわけではない。

・慣用を優先するもの（四用語集）

『リウマチ学用語集』改訂第三版（二〇〇四）「人名の表記は、慣用的に使われているよみ方を優先してある」、『アレルギー学用語集』改訂第二版（二〇〇九）「人名の表記は、慣用語に使われているよみ方を優先した」のように、慣用を重視するものが少数ながら見られた。

・日本医学会医学用語辞典にならうもの（二用語集）

『循環器学用語集』『骨粗鬆症標準用語集』の二種は『日本

医学会医学用語辞典』にならうとしている。その『日本医学会医学用語辞典』は、「外来語はカタカナ表記を用いた」としたうえで、「医学関係の人名については、これまでそのような標準的な表記がないために、混乱を招いている」とする。付表二「人名の表記法」に、用語に使われる人物がどの国の人物かを示す一覧表がある。付表は「不完全なもの」と断られている通り、カタカナ表記も掲載されているが、Addison (English physician) はアジソン、Adie (British physician) はアディーとなっているなど、慣用に基づいていると思われるものもある。全体として、『日本医学会医学用語辞典』は母語にならおうとしているが、実際は慣用を含んでいるということになる。

・考察

冠名用語は、アルファベット表記がある程度一定^(註)でも、どの言語の読みを用いるかで日本語としてのB語形の層が変化してしまうという点で他の外来語よりもゆれを生じやすい。この問題は医学全体で共通しており、各学会で対応は異なるものの、専門分野固有の事情はうかがえず、単に学会が個別に対応に苦慮している状況にあると思われる。どの言語に依拠するかという問題を回避するならば、A字種の層に問題を移して、アルファベット表記を第一にするという段階を設ける方法(小児科の原語表記)や、Bの語形の層で英語読み(泌尿器科)に統一する方法があるが、多くは人名の出身母語を基準としてB語形を決定する方法をとっている。しかし例えば、オーストリアに生まれ、幼少期以降はアメリカで暮らしたLeo BuergerにちなむBuerger病は英語読みの「バージャー病」が優勢だがドイツ語読みの「ビュルガー病」も存在し、こういったケースは判

断が難しい。B語形の問題を解決しても、それをどうカタカナに転写するかといったC表記のゆれの問題があり、これは他分野の用語とも共通する問題である。例えばEvans症候群をエバンス症候群(糖尿病学用語集)とするかエヴァンス症候群(日本医学会医学用語辞典)とするかといったゆれが生じている。このように冠名用語にはABC三層にわたるゆれが存在していることになる。

四一二、医薬品・化合物

医薬品や化合物については、二二三節で述べたように、字記の方針を適用することができる。しかし、これについて明言する用語集はわずか二種のみであった。『英和・和英生化学用語辞典』第二版(二〇〇一)は、「化合物名の日本語表記は、原則として、日本化学会 標準化専門委員会 化合物命名小委員会による「化合物命名法」に従った」として化合物の字記の表を掲げる。「化合物以外のものは必ずしもこの規準によっていない」ことも明記している。『栄養・食糧学用語辞典』第二版(二〇一五)は、「化合物名：原則として日本化学会 研究委員会 標準化専門委員会 化合物命名小委員会が示した「化合物命名日本語表記の原則」に従った」とある。日本生化学会、日本栄養・食糧学会は学問分野として化学に近い。

反対に、この二種の用語集以外には、調査範囲で医薬品・化合物の字記の方針について言及するものはなく、どの程度意識されているのかは不明である。そのため字記の方針からはずれることによる表記のゆれが見られることがある。例えば、広く

用いられる抗癌剤である cyclophosphamide は、字訳の方針に従えばシクロホスファミドで、日本薬局方にはこれで登録されている。これを採用する用語集は『リウマチ学用語集』など少なく、「フォ」を使用するシクロホスファミド（『循環器学用語集』『日本医学会医学用語辞典』『内科学用語集』『アレルギー学用語集』）が多い。また、より英語の発音に近いサイクロホスファミド（『呼吸器学用語集』）も見られた。同じ綴りなら一用語集のなかで同じ表記で統一されているとは限らず、『日本医学会医学用語辞典』では、同じ「pho」を含む医薬品である bisphosphonate をビスホスホネートとしている。

このように、B 語形のレベルである字訳の方針が存在する用語に関しても、医学分野の各学会がその表記を採用しようとする意識が乏しい可能性があり、それゆえに B 語形と C 表記のゆれが生じている部分があると思われる。

四二二、その他の名詞

・英語の語形を優先するもの（三用語集）

『内科学用語集』第五版（一九九八）では、「できるだけ英語読みに従ったが、英語読み以外の用語が慣用されていると思われるものについては併記した」として、アテトシス（アテトーゼ）、ニューロシス（ノイローゼ）などの例をあげられている。これらの例で括弧に入る語はドイツ語の用語にあたる。第二次世界大戦後、ドイツ医学からアメリカ医学を模範を変更していることから、用語の規準を英語に置くのはもつともらしいが、それ以前にドイツ語由来の外来語として定着した慣用も

多く残り、B の語形のゆれとして存在していることを示す例である。

・原語の語形を優先するもの（一用語集）

『手外科用語集』改訂第四版（二〇二二）には、「欧語の片仮名表記では、可能な限り原語の発音に近くした」とあるが、具体例が挙げられていないため、どのような場合を指すか不詳である。

・慣用を重視するもの（二用語集）

『眼科用語集』第六版（二〇一八）と『神経学用語集』改訂第三版（二〇〇八）は、いずれも「欧語を安易にカタカナ書きとして日本語用語にすることは極力避ける」とする方針を共有している。これには音訳ではなく漢語での翻訳を優先していることが前提として存在していると考えられる。このうち、『眼科用語集』では「適当な日本語訳がなく、やむを得ずカタカナ表記する場合、日本語化したものを採用し、欧語発音に必ずしも忠実ではない」として dystrophy、ジストロフィ、virus ウイルスの例を挙げる。ウイルスの表記は塩田雄大（二〇二二）が示すように、「ビールス」の語形が広く使われていたところ、一九五三年に発足したウイルス学会が「ウイルス」の語形を採用し、最終的に広まったものである。『神経学用語集』では、カタカナ表記を用いる場合として、「①日本語として定着した外来語（例：オリーブ核）、②症候名、病名で適当な日本語がなく、やむを得ずカタカナ表記するものは、日本語化したものとして（ビタミン、ウイルスの類に従い）、カタカナ表記を下記のごとく制定した」として、dystrophy、ジストロフィー、tic チックなどの例を挙げる。同じような方針をとる二つの学会で

はあるが、ジストロロフイカジストロフイーかという長音の有無は異なっており、Cの表記のゆれが存在している。

ここで二学会の言う「日本語化した」というのは、ドイツ語由来の語形が慣用として残存している例である。ドイツ語由来の用語はカルテやアレルギーなど現在でも多く使われているため、英語での読みに基づくカタカナ表記との間でBの語形のゆれが生じやすい。そしてこのゆれに対する対応策は、何をもって「慣用」と見なすかを決定できないため、現状、統一されたものはないと言うことができる。

五、おわりに

医学用語集の凡例や、実際の表記・語形のゆれを見ると、さまざまなレベルでのゆれが生じていることが分かる。本稿では、その記述のために三層のゆれを想定した。A字種のゆれとして、まず外来語をカタカナで表記するかアルファベットで表記するかという問題がある。アルファベットを第一とする用語集は少数であり冠名用語に限っているものであるが、実際の現場ではアルファベット表記はわりあい見かける。次にB語形のゆれとして、カタカナ表記を前提とした場合、広い意味での語形のゆれである原語の違い、綴字由来の表記(全訳)とのゆれがある。ドイツ語が過去に主流であったことによる慣用が大きい。さらにはどの原語かを特定した場合でも、C表記のゆれとして、長音の有無などのゆれが存在する。外来語の「表記のゆれ」といった場合Cの層が扱われることが多いが、医学分野では、AまたはBの層でのゆれが相対的に目立っていた。医学のようにドイ

ツ語と英語という二つの有力な原語が存在する専門分野において、外来語のゆれを扱う際には、本稿のゆれの三層が見通しとして有効であると考えられる。

これらのさまざまなゆれに対して、「外来語の表記」をはじめとした指針が必ずしも適用できない医学分野では、ウイルスの場合のように個別の語形・表記を確定することはあっても、実際上、分野全体で統一した方針を定められてはいない。医学に限らずこうした専門用語の外来語の表記・語形に関する議論が活発化していくことが必要だと思われる。またC表記のゆれの層だけでなく、A字種やB語形の層でのゆれまで視野を広げた議論および方針決定が望ましい。

外来語の表記・語形のゆれは、一般語においても一つの正解に統一することは困難もしくは現実的に不可能であり、「外来語の表記」でも厳密に統一を目指したものではない。それゆえ専門分野においても外来語の表記・語形のゆれを統一することを目指すのは困難であると考えられる。しかし、ある程度の推奨や許容範囲などの重みづけを行うことが現実的で必要な方向性であると思われる。その重みづけを行う判断材料を集めるためには、ゆれの類型だけでは不十分で、それぞれの表記・語形が使用される頻度などを含めた実態把握をさらに進める必要がある。

本稿の調査内容は外来語のみであったが、用語集の凡例には漢字の字体や読みの問題など、さまざまな情報が含まれる。本稿のように専門分野内の用語集を集めてその凡例を検討する方法は、外からは分かりにくい専門用語という位相語を研究する方法として、一定程度有効なものであると考えられる。

〔注〕

(一) ほかに厳密に語形と表記を分けていると考えられるものに、バとヴァ、チックとティックを「語形」のゆれとして調査した荻野綱男(二〇一三 a、二〇一三 b)がある。バとヴァについては国立国語研究所(一九八三)では「表記」のゆれとしていた。

(二) 本項でとりあげる化学分野以外には、長音をつける規則を示した一九八五年の『文部省 学術用語集 機械工学編』がある。例えば二音節以下なら長音符号をつけ(カー、カパー等)、三音節以上には長音符号をつけない(ポイラ等)などの規則が書かれている。

(三) 例えば、炭素数八個(octa)の飽和炭化水素(ane)はオクタン(octane)であるように命名の規則が定められている。

(四) クアークアについてのデータはないが、クスーキスについては、小椋秀樹(二〇一三)の調査では、さまざまな媒体のうちWEBで一例見られたのみであった。

(五) ただしアルファベット表記のなかでも、アクサンテギュ(例: Guillain-Barré 症候群の「e」)やセディーユ付きC(例: Bellet 病の「c」)を忠実に再現するかどうかや、二名以上の人名の間のハイフンの有無などにゆれが生じている。

〔付記〕

本稿は、二〇二三年二月一二日に行われた語彙研究会第一一四回例会での口頭発表原稿に加筆修正を施したものである。発表の席上、多くの有益なご教示をいただいた先生方に深く感謝申し上げます。

〔調査資料〕(本文で言及したもの)

・書籍

日本アレルギー学会編(二〇〇九)『アレルギー学用語集』改訂第二版、日本アレルギー学会

日本医学会医学用語管理委員会編(二〇〇七)『日本医学会医学用語辞典』英和第三版、南山堂

日本栄養・食糧学会編(二〇一五)『栄養・食糧学用語辞典』第二版、建帛社

日本眼科学会(二〇一八)『眼科用語集』第六版、日本眼科学会

日本骨粗鬆症学会編(二〇一四)『骨粗鬆症標準用語集』ライフサイエンス出版

日本産科婦人科学会編(二〇一八)『産科婦人科用語集』改訂第四版、日本産科婦人科学会事務局

日本神経学会用語委員会編(二〇〇八)『神経学用語集』改訂第三版、文光堂

日本腎臓学会編(二〇〇七)『腎臓学用語集』第二版、南江堂

日本生化学会編(二〇〇一)『英和・和英生化学用語辞典』第二版、東京化学同人

日本整形外科学会編(二〇一六)『整形外科学用語集』第八版、南江堂

日本先天異常用語集(一九九一)『先天異常用語集』金原出版

日本手外科学会編(二〇一三)『手外科用語集』改訂第四版、ナツプ

日本糖尿病学会(二〇一三)『糖尿病学用語集』第三版、文光堂

日本内科学会編(一九九八)『内科学用語集』第五版、日本内科学会

日本皮膚科学会学術委員会編(一九九七)『皮膚科用語集』日本皮膚科学会

日本リウマチ学会編(二〇〇四)『リウマチ学用語集』改訂第三版、
南山堂

・WEBサイト

『呼吸器学用語集』第六版(日本呼吸器学会のホームページ)

<https://www.jrs.or.jp/publication/glossary.html>

『細胞診用語解説集』改訂第一版(臨床細胞学会のホームページ)

<https://jscc.or.jp/publications/>

『循環器学用語集』第四版(日本循環器学会のホームページ)

<https://www.j-circ.or.jp/youngshu/>

『消化器病学用語集』(二〇二二年改訂、日本消化器病学会のホームページ)

<https://www.jsge.or.jp/glossary/>

『小児科用語集』第二版(日本小児科学会ホームページ)

<https://www.jpeds.or.jp/modules/glossary/>

『第十八改正日本薬局方』厚生労働省ホームページ

<https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuitebunya/000006530.html>

『泌尿器科学用語集』第五版(日本泌尿器科学会ホームページ)

<https://www.urol.or.jp/other/glossary.html>

難病情報センターホームページ

<https://www.nanbyou.or.jp/>

日本感染症学会ホームページ

<https://www.kansensho.or.jp/>

【参考文献】

石綿敏雄(二〇〇一)『外来語の総合的研究』東京堂出版

荻野綱男(二〇一三a)「外来語の語形のゆれ——チックとティック——」『計量国語学』二九(一)、三四—三九頁

荻野綱男(二〇一三b)「外来語の語形のゆれ——バとヴァ——」『計

量国語学』二九(二)、五九—六五頁

小椋秀樹(二〇一三)「現代日本語における外来語表記のゆれ」相澤

正夫編『現代日本語の動態研究』おうふう、一五〇—一七一頁

小椋秀樹(二〇一六)「現代における外来語表記のゆれ——語末長音

と[ei]の表記——」『日本語学』三五(七)、三四—四二頁

香川靖雄、花田岳美、青戸邦夫、牧野正久(一九九二)「シンポジウ

ム」外来語か訳語か「専門用語研究」四、一—三一頁

国立国語研究所(一九八三)『現代表記のゆれ 国立国語研究所報七五』

国立国語研究所

塩田雄大(二〇二二)「ウィルス」と放送用語『日本語学』四一(二)、

一四四—一五三

日本化学会命名法専門委員会編(二〇一六)『化合物命名法 IUP

AC勧告に準拠』東京化学同人

西嶋佑太郎(二〇二二)『医学用語の考え方、使い方』中外医学社

畑一夫(一九八〇)「IUPAC規則の運用と日本語への字訳」『化

学の領域』三四(二)、七一—七二頁

畑一夫・山崎一雄(一九七四)『化合物の名称』『化学教育』二二(四)、

三二—三八頁

藤井敦・田中るみ子(二〇一〇)「特許検索における化学物質の異表

記同定に向けた考察」JAPIO YEAR BOOK 2010 一八一—一八七

頁

増地ひとみ(二〇二二)「表記の手引き」類に準拠したテキストにお

ける表記の揺れ 実態調査と発生理由の検討」『早稲田大学日本語

学会設立六〇周年記念論文集』第一冊、ひつじ書房、一一七—一三四頁

松崎寛（一九九二）「外来語音におけるゆれの類型——辞典類の表記を中心として——」『言語学論叢』一〇—一一、四三—五六頁

松崎寛（一九九三）「外来語音の表記のゆれに関する定量的研究」『東北大学文学部日本語学科論集』三、八三—九四頁

日本機械学会編（一九八五）『学術用語集 機械工学編（増訂版）』日本機械学会

湯浅茂雄（二〇〇二）「外来語の表記」飛田良文・佐藤武義編『現代

日本語講座 第6巻 文字・表記』明治書院、一五四—一七六頁

「外来語の表記」(文化庁のホームページ)

https://www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/sisaku/joho/joho/kiyun/naikaku/garai/index.html

(にしじま ゆうたろう・本学大学院人間・環境学研究科博士後期課程)